

# 中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の 植林ボランティア活動報告書（要約）

山 本 健

## はじめに

### 敬愛大学国際学部の

#### 砂漠植林ボランティア活動の始動

敬愛大学・国際学部（佐倉キャンパス）が毎年行っている中国・内蒙古自治区のグブチ沙漠（黄土高原の北端）でのボランティア活動は、国際学部の開設年度（1997年）に入学してきた学生たちの熱意に負う所が大きい。つまり、何らかのボランティアを是が非でもやりたいという意欲溢れる学生数人が、積極的に学「外」に飛び出し、様々な「外」でのボランティアについての話を聞き、検討し、そして選んだ一つが「千葉県民一緑の協力隊」（代表：星恵美子）への参加であった。本学の「ボランティア活動」の授業（担当：山本健）に「ボランティア実践報告」月間を6月と11月に設け、学生たちの要望をも入れて、この「実践報告」の講師として星さんに来ていただいた（1997年6月6日）。彼女は、十数年に渡って中国内蒙古自治区の恩格貝（オンカクバイ）で植林ボランティアに打ち込んできた人物（彼女の活躍については、山本茂『緑のボランティア・蒙古砂漠をゆく』ビジネス社、1995年に紹介あり）であり、スライド、写真そして自分の体験談などを交えながら、中国

での植林ボランティアの意義などを学生に具体的に語ってくれた。やはり十数年に渡たる実践活動に裏打ちされた報告内容は学生諸君を魅了したようで、この開設年度に、学生たちの4名（加島貴典、田島清美、庄司貴美子、榎本綾乃）が実際に内蒙古自治区のクブチ沙漠（恩格貝）での植林活動に参加した。

この活動に参加した学生たちは植林活動に良い印象を持ったようで、大学に戻ってきた10月に学生仲間（私も含む）に自らの体験談を語ってくれた。このような学生自身の体験談が刺激剤となり、興味を抱いた更なる学生が沙漠緑化へ参加する、という学生たちの自発的な参加形態で、本学の中国砂漠植林ボランティア活動が始動し、2000年の今日まで4年間続いている。その間にも、前述の星さんを介して、中国現地の恩格貝植林（沙漠緑化）基地の所長、遠山正瑛先生をお呼びして、公開講演会を催した（1997年12月5日）〔写真1〕。この講演会には、国際学部の近所の佐倉市（千葉県）山王地区の主婦たちも聴講に来ていた。そして、この講演が契機となって、翌'98年の内蒙古・恩格貝での植林ボランティアにその主婦たちも参加するなど、本学佐倉キャンパス近くの地域住民をも巻き込む、学生と一般人の混合形態での、開



〈写真1〉敬愛大学・講演会での遠山正瑛先生を囲んでの記念写真（97年12月5日撮影）

かれたボランティア活動が創り出された。

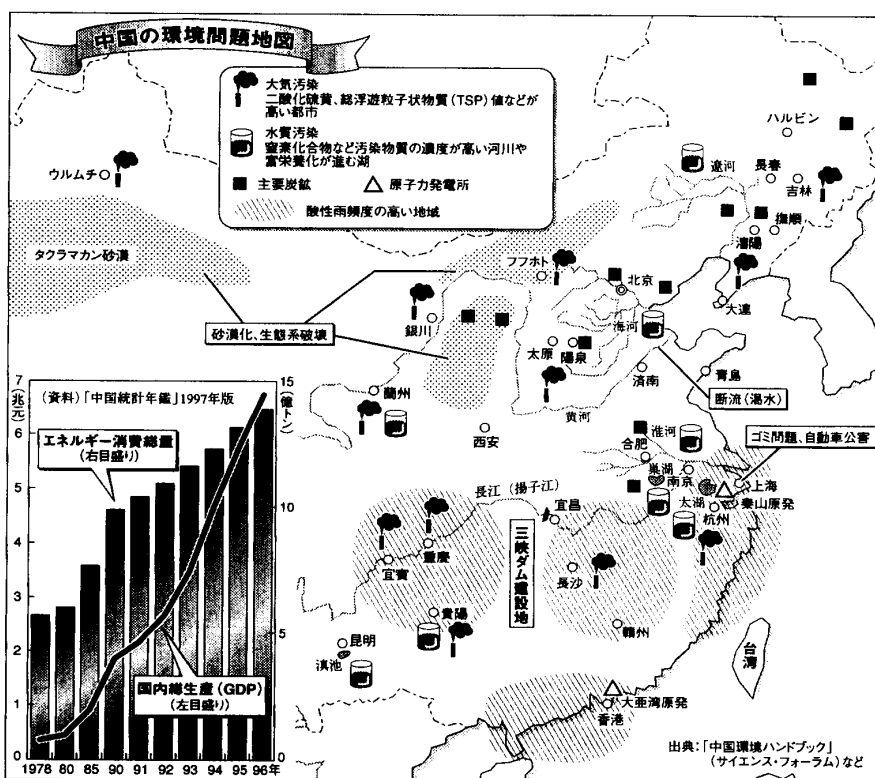
次に、このような植林を必要とする中国の環境問題（沙漠化）の現状について言及し、問題点を指摘してみたい。

## 1. 中国の環境問題の現状

まず中国での環境問題の現状であるが、近年の中国は、かつての日本がそうであったように、「高度経済成長」を最優先した結果、環境破壊が各地で顕在化し、産業公害、都市公害そして地球環境問題という、いわば三重苦の中で苦しんでいる。その実態は『読売新聞』が1998年6月11日から連載した「苦悩する大地—中国環境報告、part 1～3」から知ることができる〔図1〕。たとえば、中国ではエネルギー源の大半を石炭に、それも質の良くない石炭に依存している。そのため、酸性雨の原因とされるイオウ酸化物( $\text{SO}_x$ )の年間排出量もかなりの量に達している（「part 1:石炭王国」④、6月14日、17日）。このような化石燃料による大気汚染の他に、1980年代から急増した中小工場「郷

鎮企業」の未処理排水による水質汚染などの産業公害、また都市部での高度消費生活から生じる排ガス、生活排水、ゴミ問題それに水洗トイレの汚水などの都市公害、そして二酸化炭素( $\text{CO}_2$ )による温暖化や沙漠化などに代表される地球環境問題に、今日、中国は直面している。

本稿で報告しようとする「砂漠緑化」という観点からは、同「環境報告part 1」⑩の記事「砂漠化」（6月22日）が参考になろう。この報告記事によると、「砂漠化」とは、それまで草原などのステップ (Steppe) だった土地が干ばつや人間活動の影響で



〔図1〕中国の環境問題地図  
典拠：『読売新聞』1998年6月11日の6面

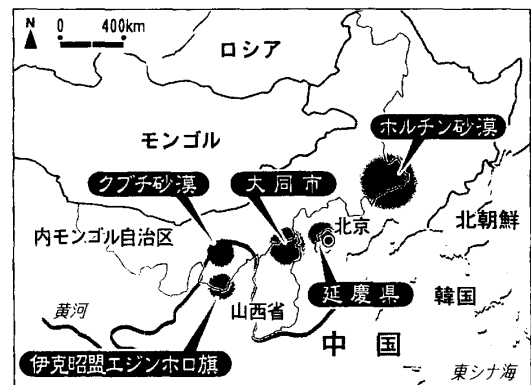
## 中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書

土地が劣化し、生産力が減少することをいう。そして、中国では毎年、神奈川県（2413km<sup>2</sup>）を上回る年2460km<sup>2</sup>の土地が砂漠化しており、このため、約300万トンの食糧減産を余儀なくされているという。

こうした砂漠化の中で、当該住民の視点に立った問題点を挙げてみると、現地に居住する住民にとっての最大の心配事は、村や家の近くに迫っている流動砂丘である。高さ10m、横幅100mに及ぶ「くの字」形に広がる砂山は年々成長している。このため、年々草地は減少し、住民は毛皮やカシミヤなど高く売れる高品種の羊やヤギの飼養に切り替えている。同時に、流動砂丘の固定化のために、植林が行われている。ただし「改革・開放」以降、「豊かな」消費生活を知った中国では、植林の意義（砂の固定化への有効性）は認めながらも、その「経済効果の低さ」が指摘され、生態環境の保全よりも砂漠開発に力点が置かれているのが現状である。

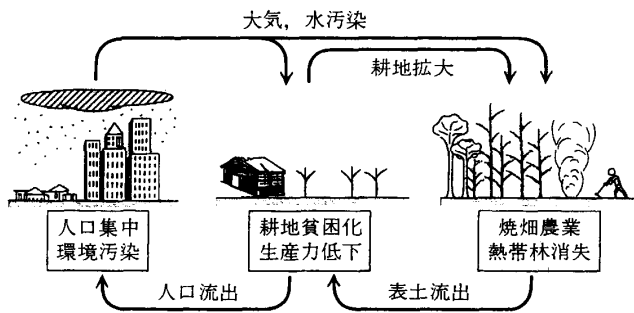
これに対して、中国政府は1999年に荒れた自然環境を回復させ、持続可能な発展をめざす「全国生態環境建設計画」を策定し、深刻化した土壌流出（国土の38%）、砂漠化（国土の27%）など国土荒廃を2050年までに改善することを決定している（「中国、自然環境回復へ50年計画」『朝日新聞』1999年1月8日）。その計画内容は具体的に、①2010年までの第1段階（揚子江・黄河の上・中流域での表土流失を阻止するための植林活動）、②2030年までの第2段階（砂漠化した土地への造林）そして③2050年までの第3段階で、土壌流出地域の回復作業の完了と植林可能な土地の緑化および荒れた草原の全面回復を行うというものである。このために、中国国民は毎年1人当たり3～5本の植

林義務を負うことになる。このような植林運動には、すでに日本の十数にのぼる民間団体（NGO）も協力している〔図2〕。日本政府も「小渕基金」として中国緑化事業に90億円拠出することを決定しているし、経団連もCO<sub>2</sub>の排出権取り引きをにらみなつつ、積極的に対応している。



〔図2〕中国での日本のNGOの環境緑化対象地  
典拠：「21世紀へ、地球みらい」  
（「福島民友」2000年1月12日）

このような環境汚染の関係を理論的に図示すると〔図3〕のようになる。この関係を定方正毅氏は人文・社会的な視点から明らかにしている（『中国で環境問題にとりくむ』岩波新書、2000年）。同氏によれば、中国における環境破壊は、人口の増加と貧困化が契機となり、都市、農村それに森林との共生関係の崩壊の結果である、という。すなわち、人口の急増や農地の劣化による農村の貧困化が進むと、都市への人口流出が生じ、都市人口が膨れ上がる。その結果、都市のスラム化が進み、同時に都市の環境汚染（大気・水）が進行する。さらに酸性雨等により都市周辺の農地は一層劣化し、また宅地化により農地・森林も消失する。他方、農村では土壌の劣化による農業生産性の低下を補うために、周辺森林の農地化が進む。その結果、森林消失に伴う（開墾農地の）表土流出が進行する。またこれを補おうとして、周辺森林のさ



〔図3〕 貧困-環境汚染の連鎖スタイル  
典拠：定方正毅「中国で環境問題にとりくむ」図2-10

らなる伐採や農地化が一層進むという悪循環に陥る。こうして、都市と農村、および農村と森林の間の貧困=環境汚染の連鎖サイクルによって、都市、農村、森林間の共生関係が崩れ、農村を中心に貧困化と環境破壊が同時に進行することになる。

以上のことから、私たち外国人（中国人から見ても）にもできる協力は、まず農地の劣化ないし流砂による消失に陥っている農村に赴き、そこでの流砂の固定化への支援であり、そのための植林作業のお手伝いであろう。そして、このお手伝いを通して、環境を守ろうとする意気込みを現地人に見せることで、現地人の環境保全への「ヤル気」を引き出すことである。そのためにも、現地人と直接「交流する」機会を多く持つことが必要であろう。

次に、私たちが中国・内蒙古自治区の恩格貝で行った植林作業について具体的に述べてみたい。

## 2. 中国内蒙古・恩格貝（クフチ沙漠）での植林活動

### (1) 内蒙古・包頭市および恩格貝

#### （クフチ沙漠）地方について

植林地のある恩格貝（おんかくばい）は、内蒙古自治区・伊克昭盟（いくしょうめい）達拉特

旗（だらとき）烏蘭郷（うらんこう）に位置する〔地図4〕。北京からは鉄道にしろ飛行機にしろ一旦、恩格貝の玄関口たる包頭市で下車する必要がある。鉄道の場合は、北京～包頭間の京包線（鉄道距離832km）を寝台急行列車で約14時間。このコースを利用した1998年の場合は北京駅を午後9時10分に出発し、翌日の午前11時30分頃に到着した。飛行機の場合、所要時間は約80分（2000年の場合）。これが首都北京と包頭市（パオトウ）の距離である。

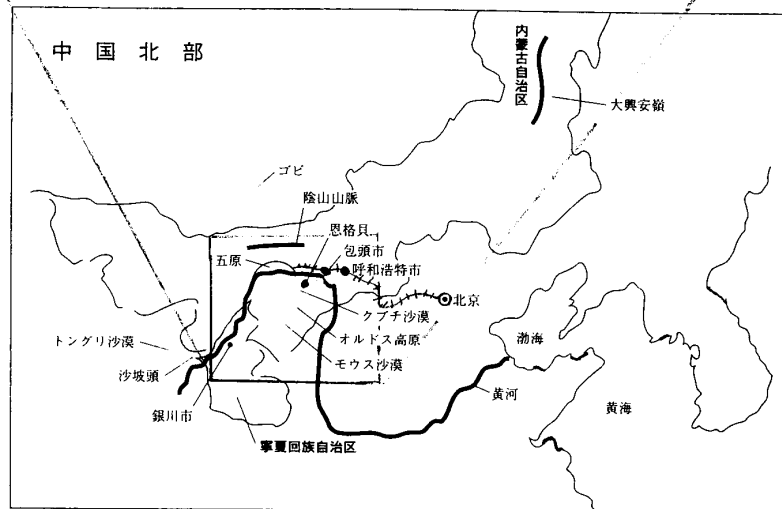
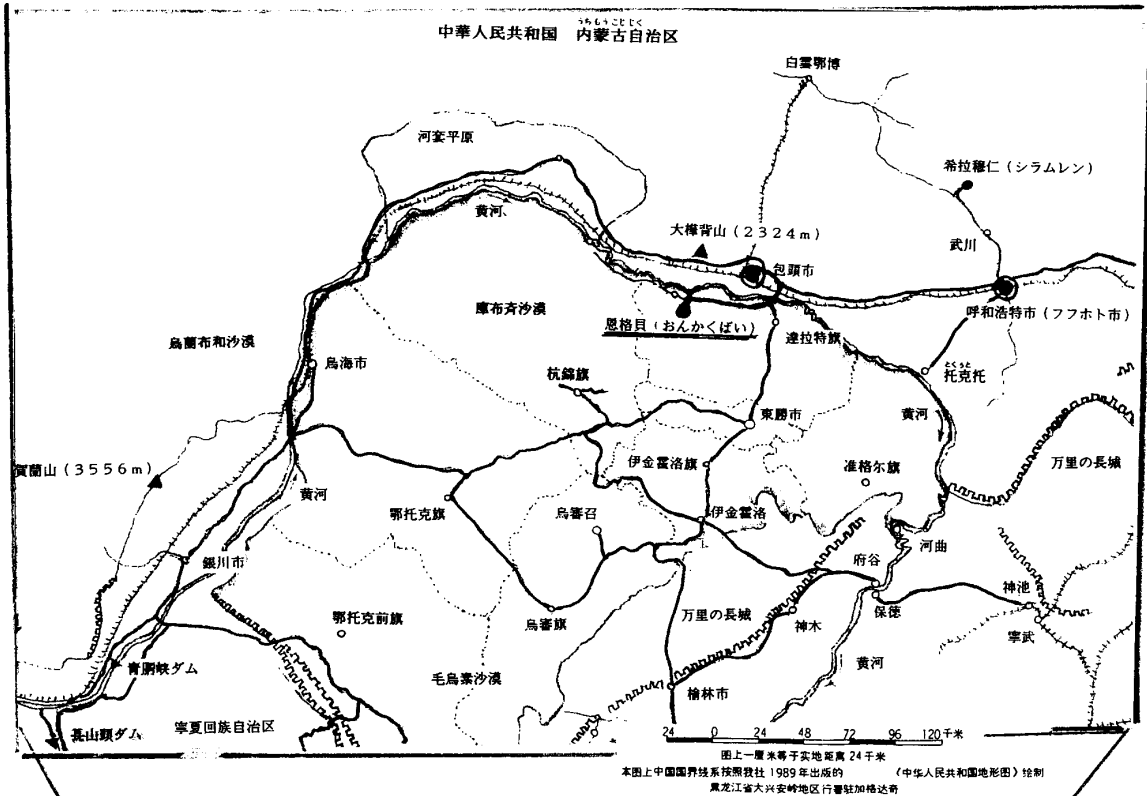
ところで包頭市は17世紀の清朝時代の開拓され、その地名は「鹿のいる場所」を意味するモンゴル語に由来する。この由来から判断すると、この地はかつて鹿が群れるほど水と草原に恵まれた地域であったと思われる。また人口も1950年代の初め（新生中国時）には僅かに9万人であったが、41年後の1991年には180万人に急増している。この人口増加の背景には、中国政府による工業化政策があった。事実、包頭市には製鉄、機械などの総合鉄鋼コンビナートが設置され、内蒙古の重工業都市に生まれ変わった。これは、近隣で採掘される鉄鉱石の他に、石炭が豊富に存在することに基づく。特に、石炭は包頭市の南約95kmにある東勝市一帯の神府東勝炭田（または東勝神木炭田）からトラックなどで搬入されている。この炭田での採炭量も2600万トンに達し、さらにその埋蔵量も中国全土の総埋蔵量の25%を占める。またこのような重工業都市の常として、スモッグ（大気汚染）が深刻である。

これと並んで侮れない「自然災害」が、冬から早春にかけて、北西のモンゴル国境のゴビ沙漠くゴビとはモンゴル語で小さい石ころ（礫）

中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書

中華人民共和国 内蒙古自治区

伊克昭盟



〔図4〕中国北部の見取り図

典根拠：山本茂『緑のボランティア・蒙古沙漠をゆく』

を意味する一般名称（普通名詞）であり、固有  
名詞ではない>から、包頭市の北側に連なる陰  
山（インシャン）山脈を越えて吹き下ろす黄風  
（ホァンヘン）と呼ぶ北西の砂嵐である。こ  
の砂嵐は激しく、市民はストッキングの様な物  
を頭からかぶって街に出る、と言われる程であ  
る。これに対して、市民たちは郊外の北側山麓  
に大規模な防風林帯を設けて対応しようとして  
いる。

この包頭市から植林基地のある恩格貝までは  
約78km。バスで約2時間の距離である。すなわ  
ち、包頭市の南に架かる黄河大橋（東勝市へ行  
く幹線）を渡り、その途中で西へ。そして黄河  
に並行して有料舗装道路を走る。やがて石灰石  
の採掘場の近くを通過し、さらに3ヶ所の橋の  
ない川を水しぶきをあげて渡る（'98年と'99  
年）。沙漠に近づくにつれ、部落の家々は日干し  
レンガを積み上げた住居が多くなる。屋根の上  
では収穫したトウモロコシやヒマワリなどを乾  
燥させていた。途中で舗装道路が途切れ、未舗  
装道路（砂利道）をもうもうと土煙をあげなが  
ら、やがて標高1130mに位置する恩格貝へ到着  
する。遠くに砂丘が連なり、また昼夜の温度差  
の激しい過酷な沙漠地帯への到着である。この  
恩格貝は日本の青森県弘前市と同じ緯度に位置  
する。

恩格貝は、黄河の流れに囲まれたオルドス高  
原の北端に位置している。そのオルドス高原は、  
周知のごとく、南の黄土高原さらにはモウス（毛  
烏素）沙漠に、また北のクブチ（庫布齊）沙漠  
へと続いている。したがって、そのクブチ沙漠  
の北端に恩格貝がある、と言ったほうが適切で  
あろう。

## (2) 恩格貝緑化基地について

恩格貝の雨量は年間平均約250ミリで、ほとん  
どが夏に集中して降る。夏の気温は昼（37度）  
夜（15度）の温度差が激しく、湿度は10%以下  
である。また冬は零下25度にまで達し、冬から  
春にかけて北西の強い風が吹きつける。この季  
節はそのため、砂塵が舞い上がり、砂丘が移動  
する時期でもある。このように恩格貝の緑化基  
地は、それゆえに、過酷な沙漠地帯の真ん中に  
浮かんでいる緑化前線基地であるといえる。

ところで、この緑化基地の宿泊所は、三井物  
産・ユニチカと中国のカシミヤ合弁会社（中華  
絨山羊発展研究中心）が造った建物を、1993年  
に中国側が改築および増築して、ベット、水洗  
トイレ、シャワー付きの2人部屋を基本とする  
平屋造りである。収容人員は約90人である。宿  
舎の入り口には、朱塗りの派手な中国特有の門  
があり、しかも電灯が灯るために、夜などは周  
辺住民が涼を求めて集まり、11時頃まで談笑し  
ている。宿舎の周辺には、現地住民の住居の他  
に、事務所、機械器具倉庫、石炭倉庫、農産物  
貯蔵庫、井戸、水タンク、ポンプ室、飲料水ペッ  
トボトル工場、果樹園、花畑、農園、桑畑、人  
口池それに記念植樹地などがある。宿舎の北側  
には、ドイツのシーメンス社製の大型風力発電  
装置がある。ただし充電用のバッテリーが設置  
されていないので、充電は不可能である。また  
宿舎の東側には3階建てのホテルが建設中であ  
る（2000年9月現在）。

飲料水ペットボトル工場の源水は、宿舎の南  
東約7kmのところで沸きだしている陰山山脈の  
伏流水である。源水地からパイプで水を引き、  
ペットボトルに詰め込む作業場が工場である。

中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書



《写真2》立派に成長した「草月の林」  
(98年9月12日撮影)



《写真5》布バケツリレーによる灌水作業  
(98年9月11日撮影)



《写真3》植林する苗木の穴掘り風景  
(98年9月11日撮影)



《写真6》穴に入れた誘い水  
(98年9月11日撮影)



《写真4》掘った穴に苗木をいれる  
(98年9月11日撮影)



《写真7》砂漠観光に来た中国人の植林参加風景  
(98年9月12日撮影)



《写真8》砂漠観光に来た中国人たちとの記念撮影  
(98年9月12日撮影)





《写真9》1997年度に植林した「わが子」との体面  
(98年9月12日撮影)



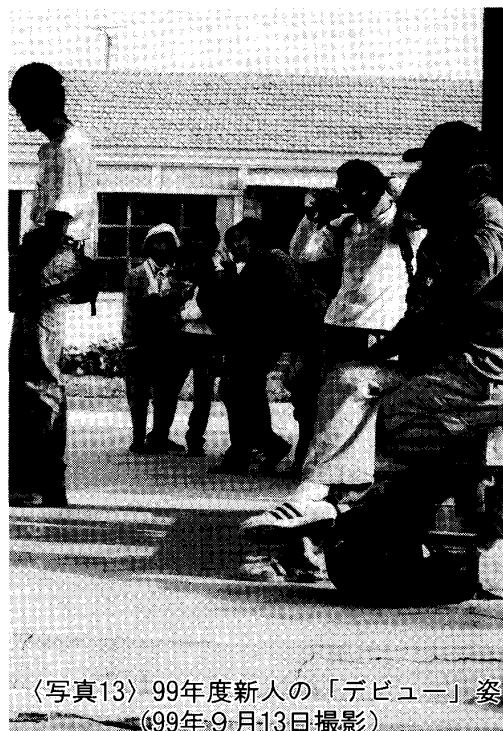
《写真10》川からプレートを捜し当て、得意満面の学生たち  
(99年9月12日撮影)



《写真11》砂漠の山を自由になげ下る学生たち  
(99年9月12日撮影)



《写真12》砂丘の頂上から底を写す  
(99年9月12日撮影)



《写真13》99年度新人の「デビュー」姿  
(99年9月13日撮影)



《写真14》草方格造りの第一作業(長い茎捜し)  
(99年9月13日撮影)



《写真15》溝掘り作業(99年9月13日撮影)



中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書



《写真16》 株造り作業（99年9月13日撮影）



《写真20》 作業現場での集合写真  
（99年9月13日撮影）



《写真17》 「肥料」（羊の糞）蒔き作業  
（99年9月13日撮影）



《写真21》 砂漠の寒村：徳生城の風景  
（99年9月14日撮影）



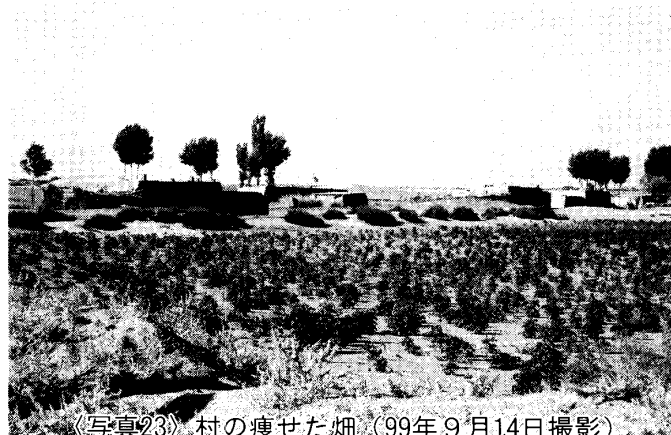
《写真18》 松を植樹（99年9月13日撮影）



《写真22》 ロバに牽かれる荷車  
（99年9月14日撮影）



《写真19》 バケツリレーによる灌水作業  
（99年9月13日撮影）



《写真23》 村の痩せた畑（99年9月14日撮影）



《写真24》村での山羊の飼育  
(99年9月14日撮影)



《写真28》宿亥図里郷での集合写真  
(00年9月9日撮影)



《写真25》遠山正瑛先生を囲んでの記念撮影  
(99年9月14日撮影)



《写真29》流砂で「崩壊」した草方格  
(00年9月10日撮影)



《写真26》宿亥図里郷の役所の入り口の前  
(00年9月9日撮影)



《写真27》宿亥図里郷での植林現場  
(00年9月9日撮影)



《写真30》田島清美さんの「分身」の成長姿  
(00年9月10日撮影)

## 中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書



《写真31》現地人と一緒に「大根」を掘る星さん  
（00年9月10日撮影）



《写真32》作業現場での集合写真  
（00年9月10日撮影）

この商品名は「恩格貝－沙漠泉」（緑色食品）である。また宿舎の南側にある果樹園にはブドウ、リンゴ、アンズなどが栽培されている。同じく南西に設けられた花畑では、コスモス、サルビア、アスター、矢車草などの種を採取する目的で栽培されている。採取した種は袋詰めにして日本でも販売されているという。さらに農場では、トウモロコシ、ジャガイモ、粟などが栽培されている。そのトウモロコシやヒマワリの茎は、収穫後に住宅周辺の野菜畑や鶏小屋などの強風よけや飛砂よけの外柵に使用できるので、重宝されている。なお、収穫したトウモロコシやヒマワリは屋根の上に乗せて乾燥させる。そのため、収穫の季節には、各家々の屋根は黄色一色になり壮観である。

### （3）植林作業について

恩格貝では、植林参加者たちが上記した過酷な気候に慣れるために、1日の沙漠観察（ウォッチング）が実施されている。そしてその後、2～3日の植林作業と、遠山正瑛先生の沙漠講座を通して沙漠緑化の意義を再認識することになる。この特徴は、教科書〔ヴァーチャル〕よりも実践活動〔リアル〕を重視する点にある。

ところで、植林に使用される木は「新疆ポプラ」を中心に、柳、榆などである。その苗木は高さ2mの2～3年ものである。また活着率が良い移植方式が採用されている。作業は①深さ50～60cm、直径30～40cmの穴を掘り、②枝を切り落とした苗木を垂直に穴にいれ、③掘り出した砂で深さの80%を埋め戻し踏み固める。④バケツなどで灌水し、その後⑤灌水した水分の蒸発を防ぐために、残りの20%を砂で埋める。植林作業は基本的にはこの①～⑤の繰り返しである。灌水用の水源は、人口池や水路からエンジンポンプを使用して、植林地の近くまで送水される。苗木は現地で買い上げる分と緑化基地自体の自給分とがある。後者の育苗地は宿舎の南西方向の第二ダム中流左岸にある。苗木はポプラの成木の枝を短く切り、これを砂地に挿し木する。約3年間育てて苗木にする。

以下では、その具体的な活動を紹介してみたい。

### 3. 敬愛大学・国際学部学生たちの沙漠 植林活動

以下では、敬愛大学・国際学部の学生たちが参加した「緑の協力隊」での活動を中心に記す。

(A)1998年—第3次千葉県民・緑の協力隊員としての参加した私のメモより。

1998年の旅は、9月6日から15日にわたり、内蒙古植林を中心に、上海・南京そして北京の名所旧跡をも見学する日程で実施された。

9月10日（第5日）

〔恩格貝にて植林活動—第1日目〕

今日から本格的な植林活動が始動。朝食後、まず沙漠の暑さに慣れるために、沙漠体験ツアーに出かける。日中の温度は34～35度。今年の日本では味わえなかった暑さである。さらに沙漠を歩くことに慣れていないせいもあってか、非常に疲れる。それでも、沙漠の中のオアシスに湧く水は冷たく、美味しい。中国に来て、初めて生水を飲んだ。まさに絶品の味である。日本の水道水のまずさをすぐ連想した。日本沙漠緑化実践協会から派遣された現地スタッフの大滝さんの話しによると、沙漠の中に植林したポプラの木は、洪水などで毎年流失しているそうだ。特に、雨期（7月中旬～8月下旬）の 때가顕著とのこと。1994年は降水量が多く、1万5千本ものポプラが流失したそうな。本当に残念である。今年はここ2～3日は気温が35度と異常に高いそうだが、沙漠に立っていると湿度が低いので、不思議と汗をかいているという実感がない。身体からの汗の蒸発量が多いと言うことであろう。事実、冷房のきいたマイクロ・バ

スに乗り込むと、車内が閉め切り状態のため、逆に汗が吹き出してくる始末である。確かに、外の沙漠の方が気持ちが良いのである。

また、今年の洪水で溜まった水を利用すべく、人工池を作った。沙漠の中に溜め池とは、なんとも不思議な気がする。また少し成長したホブラの木の枝刈りを見たが、中国人が使用している大鎌は下から突き上げて枝を切ると言うもので、日本のように上から鉋（なた）を振り下ろす、というものではない。まったく対照的な枝刈り技術である。また中国の器具は先の刃の部分が交換可能なのである。切り落とした小枝は燃料用に、またホブラの葉は家畜（ヤギが圧倒的に多く、次が鶏、そして豚など。牛は草が無いので飼育されていない）の冬の飼料にするとのこと。この沙漠の地では、すべて無駄なく利用している。

最後に、5年で立派に生育した「草月の林」〔写真2〕を見学した。ここは洪水で流れてきた肥沃な土に植林したため、短期間でこんもりとした林になったそうだ。草月流の家元が砂漠緑化実践協会に寄付したお金で植林したため、「草月の林」という呼び名がつけられたそうである。

昼食のため、緑化基地に戻る。午前中の砂漠見学で相当の疲れを覚えた。昼休み（1～3時）に学生たちの何人かが日本語を話すす売店の孟凡梅さんを取り囲んで、中国語会話の指導を受けていた（千葉大と敬愛大の女子学生）。私は暑いので日陰のセメント広場で横になって空を見上げていた。そして3時に気力つけに皆でお汁粉を飲んで、いざ出発と言うときに、現地スタッフから砂嵐が沙漠を覆いそうなので、植林活動を中止する旨、言い渡された。そのため、明日、植林する予定地をバスで下見しただけでこの日は終了した。

## 中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書

なお、この日の昼休み時間に、私は現地指導員の安田さんから、前日〔4日目：北京から包頭までの列車から〕見たビニール・ハウスで作っている作物を教えてもらった。それは中国人が好きなキュウリの栽培ハウスであった。また、リンゴやナシは小型のものが主流であり、スイカやブドウは安くて美味しい。中国では冷凍技術が遅れているぶん、作物はすべて旬の物でしかない。実に羨ましい限りである。また当地の今年の天候は4～5月頃に風が吹かず、7月にも雨は僅かしか降らなかった。今年は異常天候だそうだ。

### 9月11日（第6日）

#### 〔恩格貝にて植林活動―第2日目〕

今日から緑化基地の南に位置する沙漠地帯で植林活動に取りかかる。炎天下の中での作業である。全員がスコップを持って一列に並び、ロープに付いている印の所に穴を掘る〔写真3〕。穴の深さは約70cm（スコップの6～7割）。乾いた砂が絶えず掘った穴の中に流れ落ちる。蟻地獄とはこのことか。そして掘り終えたら、ポプラの苗木をさして〔写真4〕、再度その穴の位置が正確かどうかを確認した後、砂を埋め戻す。そして足で踏み固めて、終了である。上記の行為を5本目まで繰り返し、その後5本まとめてバケツリレーによって水を流し込む〔写真5〕。――この水は地下の湿った土から水を根元に上げるための誘い水である〔写真6〕。―そして、以上の単純な作業を淡々と繰り返していく。太陽の強い日差し、1100mという準高地のため、急激な運動（作業）は避けなければならない。

昼、「草月の林」に行って、昼食を取る。お皿に、ご飯を盛り、そして温かい大塚のボンカレーをかけ、ウィンナー半切れ、塩づけキャベツの千切り、

そして味噌汁である。沙漠という状況を考えれば、これはこれで美味しいものである。そしてデザートとしてスイカが出た。私はこのスイカを4切れ食べた。そして、午後の仕事までの約2時間は、林の中の日陰でお昼寝タイム。各人が好きな場所に腰を下ろして、涼む。涼しい風が吹き込んできて、まことに気持ちが良い。

午後の作業（3～5時）が開始。とにかく暑い。4時頃に休憩をはさんだ。ここで、再び、スイカが登場した。ここでも私はスイカをパクついた。しかし、このスイカは少し完熟し過ぎ（『腐り気味』）であった。しかし、私は「まっ、いいか」と軽い気持ちで食べてしまった。これが見事に大当たり！この日の夜から下痢状態が始まることになるとは。

夕食後、安田さんの案内で現地のモンゴル人農民の住宅を2軒訪ねた。一軒目は緑化基地の園芸労働者をたばねる人の家である。ここは比較的大きく、3部屋あった。一つは居間。ソファが1つ、イスが3脚、そしてテレビとラジカセがそれぞれ1台、部屋にあった。二つ目はその奥にあり、台所と寝室を兼ねている。もう一つは従兄弟が使っている部屋である。白湯を勧められ、これにTパックのお茶を入れて飲んだ。旦那さんが不在で15分ぐらい待ったが、帰りそうもないのでここを辞し、2軒目の家に連れていってもらった。この家は1部屋だけの、当地では典型的な家屋であった。部屋の1/3が寝室兼客間であり、1/3が台所、残りの1/3が土間という作りである。ここには、テレビがあり、今中国でヒットしている恋愛ドラマが放映されていた。これを見ようと、テレビを持っていない近所の人達も来ていた。安田さんに言わせれば、当地の若い人はこのドラマをみて「恋愛」と



はどういうものなのか、を学習する絶好の機会なのだそうだ。確かに、当地には住民の数が少ないので、恋愛もままならないように感じられる。この2軒目でも白湯のもてなしを受けた。私はこれから2軒で出された「お茶」を2杯程飲んで、寄宿舎に帰った。どうも、この頃から少し腹の調子が本格的におかしくなってきたようだ。そのまま就寝したが、真夜中の2時頃から腹痛と下痢に見舞われた。しかも同室の加島君も同じらしく、二人して交互に約30～40分置きにトイレに駆け込む羽目になる。しかもこの状態が朝まで続く。一後日、ベテランの星さんに話したら、辺境に来た初心者が受ける1種の「洗礼」みたいなものとのこと。――

#### 9月12日（第7日）

##### 〔恩格貝にて植林活動―第3日目〕

朝になっても、下痢は止まらず。朝食をパス。カロリーメイトとポカリを飲む生活が始まる。しかし8時半からの植林活動へは一応、参加した。しかし、現場に行ったものの作業にならず、ロープによる穴の位置づけ作業という軽作業を5～6回したが、それでも体調が思わしくなく、私と千葉大生の上地さんの2人は朝から「草月の林」に行ってお休みことにした。そのため、10～12時は横になっていた。そして昼食時に皆が「林」に戻って来て、昼食を美味しくほろぼっていた時も、ほとんど何も食べず（カロリーメイトとポカリのみ）にいた。午前中、仕事をせず、身体を動かしていなかったためか、今日の「草月の林」に吹く風は、前日に感じた涼しい、爽快な風ではなく、むしろ体温を奪われる「寒い風」という感じであった。

午後は、少し楽になったせいもあって、作業に参加した。しかしその作業とはいっても重労働の穴掘りは遠慮させてもらい、軽作業の綱はりなどであった。そんな時に、包頭市から来た砂漠観光の中国人一行（男―2人、女―3人、子供―1人）が私達の植林現場にさしかかった。彼らは植林作業に関心を持っているらしく、声をかけたら、中国人たちも気軽に、私達の提案に乗ってきて、一緒に作業に加わった。もちろん、彼らは普通の靴を履き、女性はスカート姿であったが、服装を気にせず作業をしてくれた〔写真7〕。この時こそ、中国語を話せる是洞さん（敬愛大学・国際学部のある山王地区の地域住民）が大活躍したのは言うまでもない。もちろん、中国人のガイド高さんが「この作業が終了したら、皆で記念写真を撮りましょう」と話をつけておいたそうではあるが。そして作業の完了後（2日間で合計、639本の植林）、ラオスから参加した平田さんが「日中友交（好の誤り。ご愛嬌！）…」と記した紙を取り出し、前列の人びとに持たせて記念写真を撮った〔写真8〕。散会した中国人たちは徒歩で恩格貝の方へ戻っていった。私達はスコップなどの後片付けをして、緑化基地に戻った。その後、記念植樹をした。もちろん、自分の名前を記したネーム・プレートをつけて。割り当てられた所は、土が非常に固く、育つかどうかは不明である。――（なお、昨年、植林した場所にも行ったが、幸運なことに昨年記したネーム・プレートが残っていた。各人の名前の他に、我が「敬愛大学」の名前もシッカリと残っていた〔写真9〕。）――現場から戻って、私は夜のキャンプファイアーには参加せず、また夕食をも食べずに早く寝た。――加島君は夕食を食べ、かつキャンプにも出席したらしく、この夜も彼は30分



## 中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書

間隔でトイレに駆け込んでいたようである。

なお、参加者18名は以下の如し。星恵美子（団長）。〔一般参加者〕星紀美子、佐藤菜穂子（以上2人は中学生）、下村喜一、杉本裕三、是洞三栄子、加藤キミ子、小倉次雄、平田京子、そして私。〔学生参加者〕田島清美、庄司貴美子、上地智子、若木優子、佐々木知裕、中村篤志、加島貴典、丸山貴久。

（B）1999年度―第4次千葉県民・緑の協力隊への参加メモより。1999年の旅は9月10日から19日にかけて内蒙古植林を中心に、西安まで足を延ばして、同地の名所旧跡を見学した。ここでも植林活動関係を中心に記す。

### 9月12日（第3日）

#### 〔呼和浩特→バスにて包頭・そして恩格貝へ〕

内蒙古自治区の省都、呼和浩特のホテル金歳大酒店（JIN SUI HOTEL）での朝食後、ロビーに8時45分に集合。これから約5時間のバスツアー。行き先は私たちの目的である植林活動の現場たる恩格貝である。10時半に呼和浩特から高速道路に入り、一路、隣り町の包頭市へ。高速道路に入っただけで、高速道路の北側には木の生えていない岩石から成る山々が迫ってきた。見事なまでの岩山である。また高速道路の南側には、トウモロコシ、玉葱、キビそしてヒマワリなどを栽培した畑が全面に広がっていた。いかにも、華北地方の風景である。車中でガイドの王（ワン）さんが、モンゴル人の好きな事として、①飲酒、②踊り、③歌唱の3点を上げた。特にお酒の場合は、飲まないなら初めから口にしないこと。途中で飲

まなくなると、相手に失礼にあたる。飲むならとことん最後まで飲むことが好ましいとのこと。またモンゴル人は9や99などを験（ゲン＝縁起）が良い数字として、好むそうである。

11時40分頃に包頭市内に入る。街に入ると人・ひと・ヒトに圧倒される。包頭とは「鹿のいる場所」の意味だそう。人口は180万人。ほとんどが移住民、とくに工業技術者の移住によって誕生した工業都市である。特に、包頭の鉄は有名で、中国で使用されている鉄のかなり割合を占めている。従って、包頭市は石炭業とその石炭を使用した製鉄業の街である。そのためか、大気汚染が進んでおり、都市の裕福な市民は「健康回復」のために恩格貝の沙漠緑化基地に来て、沙漠ウォッチングに興じている（この点は、前年度の9月12日の記録を参照）。

午後1時20分に包頭市を立って、一路、緑化基地のある恩格貝へ。しかし、その途中、今年は何と昨年には無かった私設「関所」が2ヶ所もあり、「道路利用税」を払わされた。その金額は車1台につき10元（約150円）。それだけ仕事がなく、「金持ち」の外国人旅行者から「道路利用税」なる名目で「掠め取る」挙に出ないと、生計が成り立たない『現実』が、この辺境にはあるのかもしれない。中国沿海部での「豊かさ」はこの地にはまだ及んでいない。中国が抱えている、沿海部vs.内陸部の著しい不均衡な発展の実例を垣間見た貴重な体験であった。今年は、さらなる「ハプニング」にも遭遇した。それは、昨年同様、橋が掛かっていない黄河の支流をバスで渡っていた時のことであつた。我々を乗せたバスが勢いよく川に入ったためか、バスのナンバープレート〔蒙A08944〕を川に落としてしまい、川を渡り切って河川敷を走

行していた時に運転手さんが無いことに初めて気づき、大騒ぎになった。バスの「乗客」は全員、ボランティア精神に溢れる者たちであり、直ぐさまバスを降りて川まで引き返して、川でのプレート探しを開始する。裾を捲くり、足で金属プレートを捜す。まるで泥ヒバリである。そして、金杉啓之君が見事に〔蒙A08944〕のプレートを探し当て、金杉を中心にガッツポーズをしているところを写したのが〔写真10〕である。写し出された各人の喜びの表現の違いに、各人の性格が読み取れる。学生諸君、表情にはくれぐれもご注意を！このような各人の、何の屈託もない表情の一コマを撮影できたことは、今回のボランティア旅行の「忘れられない思い出」になった。これに「共演」した各位に感謝したい。

午後3時に恩格貝に入村し、3時半に入所式を終える。入所式とはオチョコに注がれたアルコール度の強い白酒（パイチュウ）を飲むという儀式である。学生各自の飲みっぷりはというと、片手でグイッと飲む鹿島祐輔君、おっかなビックリ飲む川上里美さん、目をつぶって飲む酒井裕美さんなど、人それぞれである。式終了後、昨年からの知り合いの孟さん〔売店兼フロントの電話係〕とトウトウ君〔当用漢字にないので、カタカナ表記する〕に再会した。また星さんのお友達の子供さんには、ミッキーマウスのパンツとシャツを贈った。星さんの話によると、その中国人の友人は「自分はいつも日本人から沢山、贈り物をもらうので、近所の現地人（中国人）にもお裾分けしていたが、今回は絵柄が中国でも（もちろん日本でも）人気のミッキー・マウスであったので、自分の子供がすぐ着た」と話していたとのこと。人気アニメは日本・中国を問わず、どこの国の子供たちにも受

け入れられる「国際商品」である。

部屋割り後、各人が軽装で明日からの沙漠植林への下調べを兼ねた沙漠ウォッチングに出かけた。約1時間半の行程である。まずは沙漠の近くまでバスで移動する。そこから沙漠歩行の開始である。初めは、各人余裕があるのか、談笑しながら歩行するも、次第に隊列が長く伸びはじめ、幾度となく歩行を中断して、遅れて歩いてくる人を待つことになった。やがて視界が360度、沙漠だらけの所に到着。若い学生諸君は果敢に、砂山の頂上をめざす。頂上を究めると直ぐに山底への下降ダッシュ！

〔写真11〕もちろん、この砂山の高さは優に30～40mぐらひはあり、躊躇してしまいそうな高さである〔写真12〕。さすがに3年生の加島貴典、田島清美、庄司貴美子、それに千葉大生の佐々木知幸、若木優子の各ベテラン諸氏の健闘がひかる。歩き方に無駄がない。さっさとつぎの山へと移動する。それを追うかの如く、徐京紅さん、佐々木裕幸、沢田泰宏、中村篤志の3君が、また1年生の金杉啓介、鹿島祐輔、當間智宏の男性陣と川上里子、王金鳳、掛川朱津乃、菱木恵美、菅野真由美、酒井裕美そして工藤敦子の女性陣も「転げる如く」に下り、「息を荒らげて」登るというup-downのきつい「レース」に参戦した。3つぐらひの砂山レースで息切れの状態であった。星さんは滑り台方式での参加となる。おそらく、各自「これが沙漠か」と実感したと思われる。砂山の底に降りると、周囲の四位が分からなくなり、ほんとうに迷ってしまう。また砂の風紋も綺麗に残っており、何だかこれらの風紋に足を入れて消してしまうのかと思うと、惜しい気もした。参加者全員がそれなりに「過激な沙漠の運動会」に参加し、十分に現実の沙漠を満喫したのである。私も学生たちの陰謀に

## 中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書

はめられ、この「運動会」に参加するはめになった。過激にトライしてはみたが、案の定、足がもつれて大失態を演じたのは言うまでもない。

沙漠ウォッチング後、7時から夕食。大家族よろしく皆で丸テーブルを囲んでの食事。お喋りしながらの食事のせいか、美味しく食す。有り難いことに、掛川朱津乃さんがお茶漬けの元、海苔、そしてフリカケなどを持参し、お裾分けに預かった。本当に掛川には謝謝！これで食欲がでたのか、私のテーブルの学生諸君は大きなお茶碗で2杯飯を食べた人が多かった。とにかく、モリモリ食べて、体力をつけておかないと、明日からの本格的な植林作業が大変である。

### 9月13日（第4日）

#### 〔恩格貝にて、終日植林作業—2日目〕

6時50分に起床し、7時30分に朝食。今日もしっかり朝食を食べる。もちろん、中華料理の朝食である。8時30分までに緑化基地の門の所に集合。1年生からは「やる気満々」という気概を感じた。掛川さんは余裕のピースサインを、工藤さんは片足を引いての「お辞儀」スタイルで、また酒井さんは上下のジャージで「服装」を決め、ただ菅野さんだけが1年生らしく「緊張」して写真のコマに収まった〔写真13〕。8時37分に恩格貝を出発し、一路、今日の植林の現場へ。9時頃から現場で植林ボランティアが始まる。今年の植林活動は、気温が例年になく高温のために一く現地ガイドの王さんの話では、今年の内蒙古地方は高温で47℃の日もあったそうで、そのような日には、ただ熱風を送るだけの扇風機は役に立たず、また夜も暑さのために寝れない住民たちは、道路に出て涼を取っていた、という。もともとこの地方は涼

しいため、クーラーなどは役所や住宅には設置されていない。>一例年植えていた新疆ポプラではなく、松の植林となった。そのため、植林作業の手順も異なり、今年は全員が「初心者」であり、一から植林の方法を教えてもらった。

まず、①風砂を防ぐために、長い藁（乾燥した葦の茎）を乾草の山から捜し〔写真14〕、②それを植林予定地の砂地に運ぶ。③砂地を整地して、運ばれてきた長い藁を砂地に埋める穴を掘る〔写真15〕。そして④枠取り〔草方格〕を作り一く風砂でせっかく植林した松が砂で埋まるのを防ぐ流砂対策の1つ>一〔写真16〕、⑤松を植える穴を掘り、⑥その中に羊の糞を入れ〔写真17〕、⑦松を植える〔写真18〕。⑧布バケツ1杯分の水を松に流し込み〔写真19〕、最後に⑨乾燥した砂を掛けて、足で踏み固めれば、一連の植林作業が終了する。この9工程のうち、①が地味で、根気のいる作業であるが、使用するのは「手」だけなので、参加者の大部分の者は「口」を自由に使って楽しい「お喋りタイム」でもあった。全般的に感心したことは、参加者はほとんど全員、自発的に仕事を見つけ、嫌がらずに率先して各作業に係わっていたことである。大学の授業では見られない学生諸君の姿であった。要は、教師がいかに学生の「やる気」を引き出す状況をつくり、さらにいかに引き出すか、ということであろう。

そんなこんなで、12時30分頃に午前の部の作業を終了し、作業現場から徒歩で20分くらい離れた所にある「草月の林」に移動。ここで2時半までランチ・タイムをとる。食事は昨年同様、大塚のボンカレーを基本に、太い胡瓜（キュウリ）1本、そしてソーセージとゆで卵1個、ワカメスープというメニューである。2時半まで私はこの「草月

の林」の中で横になっていた。2時半近くに起き、リーダーの星さんからコーヒーを1杯ごちそうになる。そして再び植林の現場に行くも、今年は、昨年とは少し事情が違った。沙漠に暗雲が立ち込め、やがて雹が、そして雨も降り始める。ついには雷も鳴り出す。その雨も強く降りだしたので、作業を一時中断して、「草月の林」に逃げ込む。30分間雨宿りをした。暗雲が切れ、太陽が顔を出す。それと同時に私たちも現場に戻り、再度、植林作業に取りかかる。様々なハプニングを体験しながらも、作業は4時半に終了した。126個の草方格を作り、63本の松を植えたに過ぎなかった。この数は去年のポプラの植林本数よりはるかに少ないものの、様々なアクシデントを考慮するならば、それなりに頑張ったと納得するしかない。最後に現地で記念写真を撮る〔写真20〕。いずれにせよ、1つの仕事をやりおえた人びとの顔は、なんとなく充実感が漂っている様に見える。

5時半に緑化基地に戻り、そして基地の近くの荒廃地〔沙漠地〕に記念樹を植えた。一昨年植えた庄司貴美子さんと田島清美さんの記念樹は今年も大きく成長していた。本当に羨ましい限りである。植えても、その木の成長は植えた土地の地味や天候などに大きく左右される。1年生諸君の記念樹がどのような運命をたどるかは「神のみぞ知る」である。

夜8時～9時に同基地の所長：遠山征暎先生の「恩格貝沙漠講座」に参加する。1年生の全員と2・3年生の有志も出席していた。地球上の沙漠は実に地球の1/4を占めている。この沙漠を緑化できれば、地球上の飢えは消える。そのためにも遠山先生は中国の黄土緑化に取り組んでいる、と主張される。そして、この「黄土（レス土壌）に手

を出してはだめだ」と言われた自分の恩師リヒト・ホーヘン（米人）先生の考えは誤りである。その理由は、中国の沙漠地帯は天山山脈、崑崙（クンルン）山脈、陰山山脈などに囲まれており、その山々に降る雨水が伏流水となって、沙漠の下を流れている。だから沙漠の地下には水がある。その水（地下水）を使えば緑化は可能だと言う。また、煉瓦作りの家に土をかけるのは、この地では熱を逃がさない手段であり、従ってこの地では理想的な家であり、廃屋などと考えるはいけない。とにかく、アジア地域での沙漠・荒野での緑化を通して、『アジアは1つ、世界は平和』を達成したい、と遠山先生は力強く主張された。なお、遠山先生の話の中で、世界のアグリ・ビジネスマンは自分たちの商品（農産物）を国連に高額で、しかも大量に売却が可能のため、アフリカやアジアなどに難民が発生するのを歓迎している節が見受けられる、という意味深い言葉が、私の耳に残った。

沙漠講座は時間どうり1時間で終了した。9時半から緑化基地の広場で、現地の住民も参加してのキャンプ・ファイヤーが催された。星さんがスイトンを作って、参加者に配っていた。私は30分ぐらい参加したが、疲れていたため部屋に帰って就寝。——最後まで参加した人の話しによると、現地ガイドの王さんは、モンゴル人だけあって歌が上手であり、しかも最新の日本の歌——まで知っていた、とのこと。「商売道具」とはいえ、これ程までに外国（日本）にのめり込む気概が私に有るだろうか。

9月14日（第5日）

〔午前中、沙漠の中の貧村訪問、

恩格貝から包頭市へ〕

## 中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書

8時35分に恩格貝の緑化基地を出発して、昨年（98年）作られた8mの公道〔砂利道〕を通して沙漠の中の貧村たる徳生城（とくしょうじょう）を訪問する〔写真21〕。徳生城は恩格貝から南へ12kmの所に位置し、28戸、110人が生活している、という。この道路のお蔭で車を利用すると短時間で往来が可能になった。

住民の生活を、私が見た限りで、紹介してみると、まず、電気がない。一切ない。ランプ生活である。つまり、ここではすべて太陽に支配され、彼らの日常生活は「日の出と共に起き出し、日没と共に就眠する」ことを基本形としている。大きな荷車の牽引力はロバであり〔写真22〕、時間がゆっくり過ぎていく。作物はトウモロコシが村の入り口の畑に栽培されていた。この地もご多分に漏れず、今年は水不足のためか、成長が芳しくないことは素人の私にも分かった〔写真23〕。産業と言えるものは、ヤギの飼養で、カシミヤ作りが唯一の現金収入源である〔写真24〕。また副村長の家を訪問させてもらったが、彼の自慢は、娘さんが村でただ1人、この村から約90km離れた包頭市内の工業高校を卒業したことである。そして娘の大切な卒業証書を私達に見せてくれた。一く農村の人は、洋の東西を問わず、少し裕福になると、一家の一人を高等教育を受けさせ、その子供を自慢の種にする傾向があるようだ。＞一その娘さんは村で唯一の足踏みミシンを所有し、このミシンを使って、村人の布靴を作っていた。この事を知って、ようやく、私達が初めてあった村人のお婆さんが私達の靴を指さし、なにやら中国語で話しかけていた事が分かった様な気がした。その老人はおそらく「皆さんの靴は良いですね。できれば……」という内容ではなかったのか。またこの副村長さんの

家で、初めて飼い犬をみた。厳しい食料事情を考えると、犬などのペット類を飼うことなどは一般にはできない。この点からも副村長さんの家の「豊かさ」が理解できよう。ただし、道路が通じたことで、この村は、これまでの全ての村民が『平等に』貧しかった状態から、おそらくは「貧富の格差」が発生するであろう。村民の間に「我々の資本主義的」悪しき習慣が蔓延しないことを願いたいものである。この点を確認すべく、数年後にもこの寒村を訪れて、その変化を観察したいものである。

団長の星さんは、「外国人は自分たちに豊かな物を運んでくる手段である」と認識させてしまうと、この寒村も環境が厳しいために「自力更生」という基本的生活を放棄し、『外国からの援助』に頼りきる村になる危険性があることを指摘していたが、「資本主義的な豊かな生活に慣れきってしまい、このような寒村を単に自分が過ごした何十年か前の思い出（追体験）としてノスタルジックに訪問する」私たち外国人〔訪問者〕の側もこの点を意識して協力すべきであろう。

なお、この村には古い井戸が1本あるだけである。したがって、水不足のため収穫が少なく、貧困生活から抜けられない。一人当たりの年間収入は610元（1元＝15円×610→9150円）だと聞いた。貧困生活から脱出する手段は電気を引き込み、深い井戸を掘り、電動ポンプを設置し、灌漑設備を充実させることだそうだが、そのためには莫大な資金が必要である。また電気を引き込んだとしても、その電気料金の支払いも彼ら現地人には相当の負担になろう。事実、電気が通っているが、電柱から各家庭に電線が引かれていない辺境の諸部落を多く目にしている。やはり、電気料金を支払

える程の「豊かさ」をも手にしていない所が内陸部の諸地方にはいかに多くあることか。これが私たちが植林している沙漠地域の寒村の現状なのである。2時10分に包頭市へ向けて出発[写真25]。その途中、包頭市近くの黄河大橋のたもとで途中下車して、皆で黄河「探索」。大半の参加者は黄河での「優雅な」モーターボートに乗船した。黄河の黄色さが河の砂であり、黄河は砂自体の流れである、と言っても過言ではない。包頭駅では午後7時29分発の寝台列車が3時間遅れて入線し、北京へ向かったのは午後11時近くであった。12時頃就寝。私は列車の音を子守歌に直ぐに夢の世界へ。

なお、参加者23名は以下の如し。

星恵美子〔団長〕

〔一般参加者〕大里貞子、竹中きみよ、そして私。

〔学生参加者〕佐々木裕幸、中村篤志、酒井裕美、  
工藤敦子、掛川朱津乃、菅野真由美、川上  
里美、菱木恵美、加島貴典、沢田泰宏、田  
島清美、若木優子、佐々木知幸、當間知洋、  
王金鳳、鹿島祐輔、金杉啓之、庄司貴美子、  
徐京紅 (Xu Jinghong)。

(C) 2000年—第5次千葉県民・緑の協力隊への参加メモより。

2000年の旅は9月8日から16日にわたり、内蒙古での植林を中心に、モンゴル草原まで足を延ばし、草原での「生活」を満喫した。以下では、内蒙古・植林関係を中心に記す。

9月9日(第2日)

〔包頭→宿亥図郷(しゅはいとうごう)での  
植林→恩格貝〕

朝、包頭市のホテルの窓から遠くの連山を見る。うっすらとスモッグが掛かっている。やはり包頭市は重工業都市である。朝食は饅頭、ゆで卵、羊(牛)乳そして漬物、お茶であった。

ホテルを8時15分に出発。包頭市内もやはり2008年のオリンピック招致を意識してか、建物や道路〔都市のインフラ整備〕工事が行われていた。さらに郊外に出ても、これまで橋がなかった所にも鉄筋の橋が工事中ないしはすでに完成していた。これらの川はワジ(降雨時の川)なので、この鉄筋橋が降雨時にどのくらい耐えられるのかは疑問であるが、以前よりも移動時間が短縮できる点では有り難い。しかし同時に、面白さと言う点では、つまらなくなった。昨年の時の様な、バスが河に乗り入れる、と言うオフ・ロード的な「冒険」も体験できないし、またその時に生じたハプニング〔'99年9月12日を参照〕などにも遭遇できそうにないからである。それはさておき、今年は、恩格貝に行く途中の道路近くまで、砂が押し寄せている。砂漠化は確実に進行している。9時40～57分にかけて、バスはヒマワリ畑で小休止。私も外に出て用を足し、同時に、青空を背景とした向日葵の写真を撮る。この写真は私のお気に入りの1枚になりそうな出来ばえだ。

今年、恩格貝の緑化基地で働いている星恵美子さんを拾って、11時10分に宿亥図郷(しゅはいとうごう)に到着する[写真26]。同地区人民政府の主席(町長)李さんの出向かいを受ける。現地にいた星さんが今年同町と折衝して、私たちが同地で日本人として初めて植林するという機会をセッティングしてくれたのである。そして約1時間、すなわち12時20分まで、同町が用意した土地で植林を行った[写真27]。なお、中国のスコップは柄



## 中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書

が長く、梃子の原理をうまく利用できるように、作られている。それに較べると、日本のスコップは柄が短く、身体を屈めなければならない弱点があるように思われた。午前中の植林を終え、昼食は同町の人民政府（町役場）の食堂で頂いた。出された食事は典型的な中華料理であった。お茶はジャスミン茶に塩が混じったものであった。慣れていないせいか、私には少し飲みにくかった。こうして4時までに参加者全員の協力で150本のポプラを植える。最後に、「日本：第5次千葉県民隊造林基地」なる文字が記された看板を立て、この前で、各参加者の記念写真を撮る〔写真28〕。また各参加者は町長の李さんから感謝状を頂いた。

また、町の中の道路は土（未舗装道路）であり、かつての日本の農村を思い出させる。私にとっての中国辺境地方（農村）訪問は、私が田舎育ち（福島県会津地方）ということもあり、幼年期に見た農村風景の変容の「復習」といえるかもしれない。そして、30年後の今日の日本工業社会と中国で現在進行形で変化している社会を重ね合わせると、「工業化＝近代化」の意味がある程度、分かるかもしれない。ともあれ、4時30分に宿亥図郷を離れ、一路、寄宿舍のある恩格貝へ向かう。5時過ぎに恩格貝に到着した。

夕食は、今年からオープンした賓館の東側の新しい食堂で食べた。しかし、少し離れている（宿舎から歩いて10分の距離）ためか、不便さを感じる。ここでは、典型的な円形テーブルに中華料理。羊の肉、トマト、キュウリの炒め物、ベーコン、炒めご飯などなど。これらの味付けが、不思議と、年を追うごとに日本人好みに変化している。この様な味付けにまで、日本の影響が及んでいる。この事は、経済法則に従えば、当然かもしれない。－

グローバル化しつつある今日、体制の如何を問わず、いかなる行為にも経済法則が貫徹しており、私たちは常に経済法則を考慮して行動せねばならない、と言う教訓を示しているように思われた。＞－

### 9月10日（第3日）

#### 〔恩格貝での植林活動－第1日目〕

6時30分に起床。7時に朝食を新館の食堂で食べる。食事内容はほとんど同じ。食後、各自の部屋に戻り、準備して「いざ植林、2日目へ」と自分に気合を入れて、正面門に集合。そしてバスで30分くらいの所の沙漠の現場へ直行する。そのバスの中で現地指導員の安田さんから、包頭市の企業集団が土地が安く、かつ包頭市までの道路も良くなったので、包頭市への野菜の供給基地用にと恩格貝の土地を購入し、野菜農場を作った事実を聞いた。この事は、恩格貝もついに包頭市の農業基地として一定の役割を与えられたことを意味する。このことは、ともあれ、中国人（企業家）が植林によって沙漠の移動が止まり、沙漠が野菜畑という経済的な価値物へ転化したことを認め始めた事例として特筆すべき出来事であろう。

今年の植林現場は、なだらかな砂の丘陵地である。例年のごとく、植林作業を12時頃まで続ける。また12時～2時までが、昼食時間兼昼休み。今年の昼食は昨年までのボンカレーではなく、砂地に竈（かまど）を造り、周囲の枯れ木を燃料にして作った、温かい水餃子とワンタン、炒めご飯、ソーセイジ、ゆで卵そしてキュウリといった献立であった。特に、温かい水餃子とワンタンは美味しく、大きな鍋で作ったにもかかわらず、参加者全員で残さず平らげる。そのためか、現地指導員の安田さんは「明日は、水餃子とワンタンだけで十分な

のでは！」などと皮肉られる程であった。私も水餃子とワンタンを2杯食べた組であった。

食後は①昼寝をする人、②沙漠ウォッチングする人、③周辺の木立を散策する人と、各人思い思いの行動を楽しむ。お歳を召した方々は①組へ、若者たち（藤井香野緒、笠原祐介、佐々木裕幸、浜崎昭博、田島清美、徐京紅、中村篤、霍文亮そして後藤ゆかり〔江戸川大生〕の学生諸君）は②組である。なお、田島さんは砂漠に設置された竈が珍しいのか、竈に興味深く見入っていた。私は現地の「友人」たるトウトウ君と話をした。その彼が今年の5月8日の『朝日新聞』の広告欄を大事そうに見ていたのも、「なにか気に入った記事でもある？」と尋ねた程であった。それは、あのノリピー（酒井法子）がモデルとして載っている月刊『ヤング・ミセス』の新聞広告であった。ノリピーは、以前、出演した日本のテレビ番組が中国で放映されてから、中国人の間で急速に人気を博し、今や、彼女は中国人なら誰でも知っている有名なトップ・クラスの日本人女優なのである。いずれにせよ、中国人は理想的な日本女性像をノリピー（酒井法子）が演じた役柄に求め、やがて主客転倒してノリピーその人に求め出したのであろう。さらにトウトウ君が言うには、最近、中野良子主演のテレビ・ドラマ〔タイトル不明〕が中国で放映された結果なのか、中野良子の人気も高いとのこと。その理由として、テレビ・ドラマの中での彼女の役柄と日本女性としての気質に、中国人は惹かれたようだ。しかし、これは、「日本女性はこうあるべし」という中国人たちの願望であり、また中国人のステレオ・タイプ化された日本女性像でもある。

彼との会話を終えて、私も沙漠ウォッチングへ

出かけた。今年は砂丘に植林し、流砂のため砂に埋もれた「不幸な事例」〔写真29〕を多く見ることができた。これも「砂丘は移動する」の実例として割り切らなくてはいけないであろう。それにしても残念である。

2時～4時26分で午後の作業は終了。合計で364本を植える。寄宿舍へ帰る前に、冷たい地下水で各自の顔や手などを洗う。またこの水を飲む。本当に冷たく、美味しい水であった。涼しい風も吹きはじめ、確かに作業の潮時であった。この時、浜ちゃん（浜崎昭博君）が暑さのためにランニング姿で作業をしていたのだが、身体も顔も日焼けしていた。これを、浜ちゃん自らが「どこで焼いたの。つい一寸モンゴルで」と冗談をかまして、その場にいた仲間を笑わせていた。やはり浜ちゃんの「日焼け」から判断しても、日差しがかなり強いことが実感できた。

寄宿舍に戻る前に、田島、佐々木、徐そして中村の諸君と私は、以前に記念植樹した場所に行ってみた。田島さんの木は、プレートが残っていたせいもあり、確認された。すでに4年目に達しており、4mぐらいに成長していた。近くには、庄司貴美子さんの植えた木も同様にスクスクと成長していた。それ以外の学生の木は、残念ながら活着しなかったようで、その存在すらなかった。田島さんは、中国での自分の「分身」と一緒にキメのポーズで、パ・チ・リ！〔写真31〕おめでとう！彼女は毎年、自分の「分身」の成長を口実に、中国（内蒙古）に行く必然性ができたようである。

なお、ロン毛の浜ちゃんは、川元さんがふざけて彼を「女性」と紹介したためか、中国人から「珍しがられ」やたら身体（髪）をさわられ、さらには抱きつかれる羽目になった。そのためか、彼は、

## 中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書

女性が身体を触られることを嫌がる気持ちが理解できたと話していた。セクハラにはご注意を！

### 9月11日（第4日）

#### 〔恩格貝での植林活動－第2日目〕

今年唯一の違いは、水を入れる時、強力な動力ポンプを用いたことである。水圧が強いため、多数の人間でホースを押さえつけなければならぬ。また中間のホースに小さな穴があいており、この穴を押さえようと佐々木君が水を浴びながらも押さえ続けていた。佐々木君、君の「縁の下で力持ち」的な行動に対して、皆に代わって「有り難う」。12時4分に午前中の作業が終了。昨日の分を含めて、この地に植林した本数は508本に達した。

2時から3時40分まで、再度砂漠ウォッチングへ。星さんと徐さんが現地住民と会い、沙漠の「大根」なる植物を教えてもらい、引き抜いてきた〔写真31〕。この沙漠の「大根」を食べさせてもらったが、本当に大根の味がした。「沙漠は不毛な土地」と考えがちであるが、どうやら、そう考えるのは「現場」を知らない人間の無知に由来しているようである。あまりにも無知な自分を再認識した。砂すべりや一人瞑想（浜ちゃんや中村君）して楽しむ学生。浜ちゃん曰く、「自然の音を独り占めすると、こんな感じなんだ」と。日本での時間の流れや喧騒さとは根本的に異なる静寂感を表現したのかも知れないが、日本と異質な世界があることを知ってもらえただけでも、この沙漠植林ツアーに参加してもらって良かった〔写真32〕。

4時20分に星さんの現地の友人である中国人女性の二男のお店―（ここが、昨日シシカバブを食べたお店）に到着。星さんがこの店の調理道具を借りて、白玉を作り地元の住民および私たち協力

隊が食べることになる。アンコは日本から持ってきた缶詰のもの。白玉作りの過程で、田島さんがこの「アンコ」をおかずにビールを少しひっかける。これを見た星さんがすかさず「これじゃ、お嫁の貰い手がないかもね（笑い）」と、からかっていた。

7時から夕食。今日は恩格貝での最後の夕食のせいか、複数の果物（スイカ・メロン・ハミウリ）が食卓に並べられていた。それ以外のメニューは前日とほぼ同じ。夕食後、売店で孟さんからコーヒード豆を挽いたコーヒートを頂く。この2～3年前には考えられない事であった。どんどん、日本の生活文化がこの辺境にまで流入している様子が手に取るように分かった。しかし、この日は午後8～9時の間に3回の停電があり、その度に孟さんがローソクに火をつけてくれた。導入された高度な消費生活と1時間に3回もの停電〔インフラ面の不備〕というこのアンバランス。この事実が、いみじくも現在の中国を象徴している様に思われる。このような中国の「辺境」の地にいると「中心部」の矛盾した行動が理解できると主張していた現地指導員の安田さんの言葉が今更ながら思い出された。

### 9月12日（第5日）

#### 〔恩格貝からバスで呼和浩特へ〕

8時24分に恩格貝を出発。ここから呼和浩特までは250km。バスで3～4時間の距離である。まずは包頭までバスで1時間。9時27分に包頭市の手前で交通渋滞に巻き込まれる。トラックが自転車を巻き込んだ人身事故を引き起こし、その現場に交通整理の警官がいなかったために、各車両が我先に通過しようと道を譲らず、さらなる交通渋滞を

引き起こしていた。幸運なことに我々のバスはこの事故現場を10分ぐらいで通過することができた。本当に幸運であった。一般に、中国の道路はまだ整備されない悪路が多く、また土地柄なのか、石炭を満載したトラックが故障して、道路に放置されているケースが多く見られた。9時40分によりやく包頭市内に到着。

ここから、高速道路らしきものを通るも、まったくの一般道路。考えてみたら、日本の県庁所在地に当たる呼和浩特（内蒙古自治区の省都）からの「下り車線」の高速道路は出来上がってはいたが、「上り車線」は資金不足で作られてはいない。だから、一般道路を高速道路として通行させ、「高速」料金を徴収して、この金を建設資金に利用しているのである。2008年のオリンピック招致に照準を合わせて作業をしているのであろうか、部分的に「上り車線」の基礎工事（土台作り）が行われていた。やはり、日本人の性急な性格では推し量れない悠長な建設工事である。10時10分に休憩をとる。多くの近隣農民が道端で、取り立てのブドウやリンゴを露店販売していた。それらの果物を購入して10時20分に再度出発。12時05分に呼和浩特市に到着。そして、12時32分に「銀燕差面（インウェンツォウミイアン）」店で、饅頭を食べる。私は羊肉差面（辛）を頼む。確かに辛いですが、美味しい。私たち4人のテーブルには、饅頭が入った大きな鍋3個と小井が、そして野菜炒めに、自分の味好み用のトッピングが運ばれてきた。そして各自の小井に分けて、お好みの味で食する。約1時間を昼食に費やし、1時34分に食堂を出て、ホテルの「金歳大酒店」に1時50分に到着。昨年と同じホテルである。ここで40分寛いでから、2時30分に内蒙古大学を訪問する。ここで、ようやく、

私の荷物が減った。というのは、今年、内蒙古大学・日本語学科の学生さんにお土産として「日本の新聞（『読売新聞』の朝・夕刊）を約1ヶ月分持って来ていたからである。主任の劉先生が多忙のため、私が挨拶をした。日本人の学生からは「先生の話は少し長すぎた」と不評。——私の話を要約すると、日本（人）の良い面しか見ない中国人の見方に警鐘を鳴らすべく、日本にも悪人も沢山いること、良・悪のバランスを取って、日本（人）を見てほしい、というものであった。

また内蒙古大学の学生たちは、日本の情報、例えば、中田がヨーロッパ・サッカー界で活躍していることを知っており、「彼はアジア人として立派だ」とのこと。またシドニー・オリンピックが近づいていたせいもあり、各競技についても話題になった。また例年のごとく、内蒙古大学の運動場では新入生の軍事教練が行われていた。男女共に迷彩服を着て訓練していた。日本の若者同様に過保護に育てられているせいか、なよなよとした学生も散見できた。大学生は寮生活が基本であり、アルバイトなどはしない。と言うより、時間を惜しんで勉学に励んでいる。なぜなら大学の成績が、即、就職の切り札だからである。最後に、正面玄関で、全員の集合写真を撮る。その後、彼らを夕食に招待して、話を聞いたが、学生は私たちを練習台に自分の日本語を磨いていたのが、印象的であった。

なお、参加者16名は以下の如し。

小倉次雄〔団長〕

〔一般参加者〕 斉藤裕美、斉藤友喜、平田京子、

萩原慶次、星恵美子そして私。

〔学生参加者〕 田島清美、後藤ゆかり、藤井香野

## 中国内蒙古での3年間（1998～2000年）の植林ボランティア活動報告書

緒、佐々木裕幸、浜崎昭博、中村篤志、笠原祐介、徐京紅(Xu Jinghong)、霞文亮(Hou Wenliang)

### おわりに

敬愛大学・国際学部の中国内蒙古・恩格貝（クブチ沙漠）での植林ボランティア活動は、星恵美子さんという好人物にも恵まれて、1998年には学生10名（一般人9名）、’99年には学生18名（一般人4名）そして2000年には学生9名（一般人7名）という参加者で行われた。年によって、参加者数にかなりのバラツキがあるのは、学生の自発性を反映したものであり、ボランティア活動としては「健全」な証拠であろう。参加者の中には、リピーターも多く、特に田島清美さんは在学4年間、毎年参加していた。彼女は、おそらく、その参加を通して、内蒙古の沙漠の寒村の変化を、またその住民の彼女（日本人）に対する対応の変化を観察できたことであろうし、また、何よりも1年目（’97年）に植樹して、今のところは順調に成長しているいわば彼女の“分身”の力強さを感じたことであろう。その“身長”は優に5mは越えており、優良木に育っていた。またその成長を我が目でみることで、“自分自身の成長”をも客観的に推し量る“場”を手にしたのではないだろうか。彼女には、できれば卒業後も、恩格貝を訪問してもらいたい。ちなみに、植樹した苗木は新疆ポプラである。これは、佐倉キャンパスのグランド沿いの土手に、下村喜一さんのご好意で苗木をいただき、植えてある。現在、この木は4～5mに育っている。

またここ数年、中国人留学生（徐京紅、霞文亮

の両君）の参加もめだつ。彼らは「豊かさ」の追求に汲々としている今の中国の「負の側面」を直視して、何かを感じ取ったにちがいない。

今年も、自省の場として利用していた学生も数名いた。彼ら曰く、「自分の呼吸の音しか聞こえてこない、この沙漠の静寂さを日本に持ちかえりたい」「この静けさは日本とどこか違う」と。これも沙漠と言う大自然（大宇宙）の中では、自分がいかに小さい存在でしかないのかを理解し、かつ無意識の内に感じ取った学生の本音であろうか。また’99年の植林活動では、大学構内（日本）では“普通”の学生が積極的に動き、同行した年配者への手助けはもちろんのこと、現地の中国人運転手の手伝いまでしていた。このような学生たちの行動ないしメッセージから、教員たちも学生の関心がどこにあるのか、ないしはどこに向けられているのかを正しく把握し、学生にそのような場を提供、ないしそのサポート役として立ち回る必要があるのではないだろうか。学生たちは植林ボランティアを介して、「自ら動くことによって、新しい価値を発見する」（金子郁容『ボランティアもう一つの情報社会』岩波新書、1997年）ことを理解した、と思われる。したがって、次にわれわれ教員側もそのような学生たちに、次のステップとして、彼らの関心を社会問題と係わらせる工夫が必要ではないだろうか。学生に、ボランティアを基礎に社会をリニューアルする能力を発揮させるためにも。

最後に、国際学部の開設年度（1997年）に入學し、意欲溢れる活動で、今日の中国・内蒙古での沙漠植林活動を引っ張った4年生の学生たち：田島清美、加島貴典、庄司貴美子、佐々木裕幸、徐京紅らの諸君に感謝したい。なお、内蒙古での沙

漠植林についての詳しい報告は、私の「中国・内蒙古植林体験記'98年」、同「'99年」そして「2000年」を参照してほしい。また、私たちが帰国した後(2001年の秋季)、徳生城の寒村に電気が灯ったとの便りを聞いた。しかし、どのくらいの家庭が電気を利用しているかは不明である。

\*なお、本稿は環境研究所運営委員会の許可を得て、『本誌』第9号、2001年(125-163頁)の要約を掲載したものであることを明記しておく。